

1

次の英文を読んで、以下の設問に答えよ。

- ① A very upper-class, very respectable British professor once remarked to me that visiting Tokyo made him feel *shabby because everyone he met, on the subways, in office buildings, in department stores, on the street — everyone in Tokyo looked *prim, clean and well-dressed. This is not the case in either the
5 United States or Britain.

The kind of clothes one wears in the United States is somewhat different from what one wears in Japan. I have felt this difference often during my career as a professor in both Japan and the United States. Partially, there is less concern, less social emphasis on clothes in the United States. ② When I am working at an
10 American university, I am less concerned than when in Japan about what impression I will give by the clothes I wear. Consequently, I am much more likely to come to class, or to a faculty meeting, wearing blue jeans and no tie. Some American colleagues will have on suits and ties and some will be dressed like me. This is the variety, the *heterogeneity of American life.

- 15 ③ Although I try to maintain my American style of dress as much as possible in Japan, I always find myself to be “dress conscious” when living in Japan. I am expected, as a professor, to wear a suit and tie and often force myself to ④ do so. On those occasions when I do not, I can tell that my Japanese colleagues are somewhat disturbed by my lack of *decorum.

*shabby : 「みすばらしい」 *prim : 「きちんとした」

*heterogeneity : 「不均質；異種混交性」

*decorum : 「(服装などの) 上品さ；礼儀正しさ」

Popular Culture in Japan and America by Bruce Stronach (成美堂)

- (1) 下線部①の人物について、以下の問いに答えよ。

A. 次の問いかけの答えとなる語を本文中より 1 語で抜き出して答えよ。

How did the professor feel when he visited Tokyo?

— He felt ().

B. A の理由を日本語で簡潔に答えよ。

- (2) 下線部④の具体的な内容を本文中から英語で抜き出して答えよ。

- (3) 次の各文が本文の内容と一致していればT, 一致していなければFと答えよ。
- ア The Japanese style of dress is much the same as the British one.
- イ Some American professors wear suits on campus, and some are casually dressed.
- ウ More social emphasis is put on clothing in Japan than in America.
- (4) 下線部②, ③を和訳せよ。

解答

- (1) A. shabby B. 東京の人は皆きちんとした身なりをしているから。
- (2) wear a suit and tie
- (3) ア F イ T ウ T
- (4) ② 私はアメリカの大学で働いている時には、身に付ける服装によって自分が人にどのような印象を与えるのかということに、日本にいる時ほど関心を払わない。
- ③ 私は日本にいる時にもできるだけアメリカ流の服装を維持しようとしているが、日本に住んでいる時にはいつも気がついてみると「服装を意識」している。

解説

- (1) A. 下線部①に続く that 節内の visiting Tokyo made him feel shabby は SVOC の文型で「東京を訪問することは彼をみすばらしい気持ちにした」の意。O と C の間には SV の関係 (he felt shabby) が成立している。疑問詞 how は S+feel +C (～に感じる) や S+look+C (～に見える) のように知覚動詞に続く C の部分をたずねている。
- Ex. How do I look in my new suits? (新しいスーツどうかな。)
- You look great! (すごく似合ってるよ。)
- よって A の空所には shabby が入る。
- B. 下線部①を含む文の後半で理由を表す接続詞 because が用いられていることに注目して、because で始まる節の内容を簡潔にまとめればよい。ダッシュ (—) の前の部分は、ダッシュの後の everyone in Tokyo を具体的に言い換えた内容なのでここは含めなくてよいだろう。また、prim, clean and well-dressed の部分もすべてを逐語訳する必要はない。「東京の人は皆きちんとした身なりをしているから。」のようにまとめればよいだろう。
- (2) do so は同じ動詞句の反復を避けるための代用表現である。下線部を含む文の訳は「教授として私はスーツとネクタイの着用を期待されており、しばしばそうせざるを得ない。」となるので、do so の内容を「スーツとネクタイを着用するこ

と」を考えれば文意がつながる。よって、下線部の前の部分から wear a suit and tie を抜き出せばよい。

Ex. If you wish to scream, you may *do so*.

(叫びたいなら、そうしてもよろしい。) do so = scream

- (3) ア 「日本の服装のスタイルはイギリスとほとんど同じだ。」第1パラグラフが該当箇所。第1文でイギリス人教授が日本では服装のせいでみすばらしい気持ちになることが述べられ、第2文で日本とアメリカやイギリスでは身なりに関して事情が違うことが述べられている。したがってこれはF。

イ 「アメリカの教授には、大学構内でスーツを着用する人もいるし、普段着のような人もいる。」第2パラグラフ第6文にこれと同じことが述べられているので、これはT。

ウ 「日本ではアメリカよりも服装が社会的により重要視されている。」第2パラグラフ第3文が該当箇所。「身なりがアメリカでは日本ほど社会的に重要視されていない」旨が述べられているのでT。

- (4) ② ○全体は When $S_1 + V_1$, $S_2 + V_2$. (S_1 が V_1 する時, S_2 は V_2 する。) という構成。主節 $S_2 + V_2$ … の部分が複雑な構成になっている。

○ When I am working at an American university 「アメリカの大学で働いている時には」

○ I am less concerned 「私はさほど関心を払わない」ここが文全体の中心となる主節で、 $S_2 + V_2$ に該当する箇所。less は little の比較級で否定語に準じた働きをしていることに注意。

Ex. Domestic violence happens *less* than it used to.

(家庭内暴力は以前ほど起きなくなっている。)

○ than when in Japan 「日本にいる時よりも」比較級の less と呼応して、比較の対象を than が導いている。when (I am) in Japan のように、when の後に S + be を補って考える。

○ about what impression I will give by the clothes I wear 「身に付ける服装によって人にどのような印象を与えるのかということについて」I am concerned about ～ というつながりを確認しよう。be concerned about ～ は「～に関心を払う」の意の慣用表現。

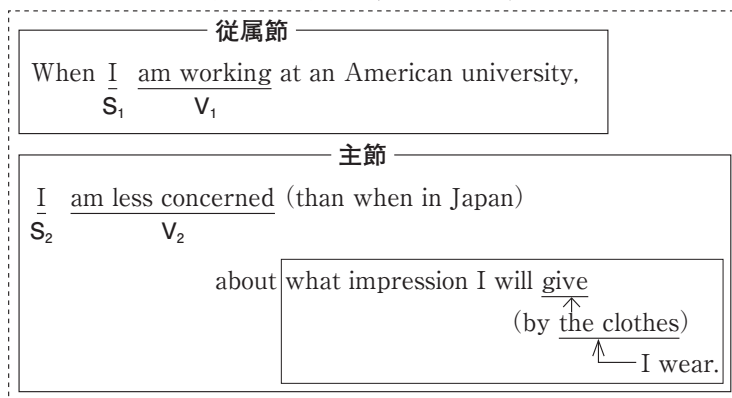
Ex. She *was not concerned about* the result of the exam.

(彼女は試験の結果に関心はなかった。)

前置詞 about の目的語は、疑問形容詞の what が導く名詞節全体であることに注意。I will give ～ impression (私は～の印象を与える) の ‘～’ が what に変わったものと考えればよい。by the clothes (服装によって) は give を修飾する副詞句。clothes と I の間には他動詞 wear の目的語となる目的格の関係代名詞が

省略されていると考える。

○以下に文全体の構成を示すので、整理しよう。



③ ○全体は Although S₁ + V₁, S₂ + V₂. (S₁ が V₁ であるけれども, S₂ は V₂ だ。) という構成。この although は逆接の接続詞。

○ Although I try to maintain my American style of dress 「アメリカ流の服装を維持しようとしているけれども」 try to do は「…しようとする」の意。

○ as much as possible 「できるだけ」 as ~ as possible は「できるだけ～」の意の慣用表現。なお, as ~ as one can も as ~ as possible と同じ意味の表現として覚えておこう。

Ex. Kick the ball *as far as possible* (= you can).

(できるだけ遠くまでボールを蹴りなさい。)

○ in Japan 「日本では」

○ I always find myself to be “dress conscious” 「いつも気がついてみると『服装を意識』している」 find O C という形。なお find oneself (= O) + C の時, 直訳は「自分自身がCであることに気がつく」となるが, 訳例のように「気がついてみると～だ」のように訳出すると自然になる。

Ex. I awoke to *find myself* lying on a bed.

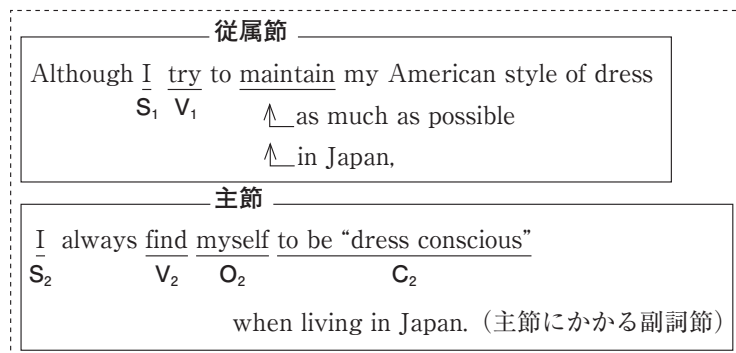
(目を覚ますと, 私はベッドに横たわっていた。)

X conscious は「Xを意識して」の意。基礎にあるのは conscious of X (Xを意識して) という表現。

cf. a *media conscious* politician (マスコミを意識した政治家)

○ when living in Japan 「日本に住んでいる時には」 when (I am) living in Japan のように S+be を補って考える。

○文全体の構成は以下の通り。



重要語句

- **not ... either A or B** 「AもBも…ない」
Ex. She *cannot* speak *either* French *or* German. (彼女はフランス語もドイツ語も話せない。)
- **concern** 「関心 (事)」
- **be likely to do** 「…しそうである」
Ex. He *is likely to* do well. (彼はうまくやるだろう。)
- **expect** 「～を期待する；～を予期する」
- **force O to do** 「Oに…することを強いる」
- **occasion** 「場合；機会」
- **tell** 「～がわかる」 この意味では、通例 can, be able to と共に用いられる。

注

- ☐ upper-class 「上流の」
- ☐ respectable 「尊敬すべき；(尊敬に値するほど) 立派な」
- ☐ remark 「～を言う」
- ☐ somewhat 「いくぶん」
- ☐ career 「職業」
- ☐ emphasis 「強調」
- ☐ consequently 「その結果として；したがって」
- ☐ faculty meeting 「教授会」
- ☐ colleague 「同僚」
- ☐ variety 「変化に富むこと；多様性」

全訳

極めて上流の、大変立派なイギリス人の教授がかつて私に言ったことには、東京を訪れると自分がみすぼらしいと感じるのは、地下鉄でもオフィスビルでもデパートでも路上でも、出会う人すべてが、すなわち東京の誰もが、上品で清潔できちんとした身なりをしているように見えるからだということだった。アメリカでもイギリスでもこういうことはない。

アメリカで人が身に付ける服装の種類は、日本で身に付けるものとはいくぶん違っている。日本とアメリカの両方で教授として働いてきて、私はこの違いをしばしば感じてきた。1つには、アメリカでは日本ほど服装に関心が払われたり、服装が社会的に重要視されたりすることはない。私はアメリカの大学で働いている時には、身に付ける服装によって自分が人にどのような印象を与えるのかということに、日本にいる時ほど関心を払わない。(②) だから、授業や教授会に出かける時には、ブルージーンズをはいてネクタイを着用しないことの方がずっと多い。アメリカの同僚の中にはスーツとネクタイを着用する人もいるし、私のような服装の人もいる。これがアメリカの生活の多様性、異種混交性なのだ。

私は日本にいる時にもできるだけアメリカ流の服装を維持しようとしているが、日本に住んでいる時にはいつも気がついてみると「服装を意識」している。(③) 私は教授としてスーツとネクタイを着用することを期待されており、しばしばそうせざるを得ない。そうしていない場合、日本人の同僚が私の無作法さにくいふんとまどっていることがわかる。